

お試し版！

瀬川くんは

ゲーム

だけ

して
いた
い。

中
の
味
大
の
ア
ニ
メ
カ
ラ
イ
ズ

カバー・口絵・本文イラスト
ちり

プロローグ

Segawa-kun ha
GAME dake
shiteitai.



「ゲームの中にはこの世の全てが詰まっている」と、瀬川世一は言った。

「あるいは、この世の全て以上のことさえ」

世一はゲーム好きだ。ファミリーコンピュータから連綿と続く、いわゆるビデオゲームの類が大好きだ。

時に世界を救う旅に出て、時に暗殺者となつて標的を追う。時にモンスターを狩り、時にモンスターとの絆を育む。名探偵となつて謎を解き、兵士として戦場で命を賭け、武将として史実を覆しストリートで格闘を繰り広げ数多の恋から真実の愛を見つけ競走馬を育てて重賞を制し市民が住みよい街とは何かを考え戦闘機や巨大ロボットに搭乗して敵機を撃ち落とす森や荒野を切り開いて自分だけの街を築き上げサバイバルのためにクラフト術を学びサーキットで速さの向こう側を知って……、そしてたった一人を救うために世界を敵に回す――

そのすべてを可能にするのが、ゲームだ。

「つまりゲームとは、人間の想像力が最も大きくその翼を広げた場所に他ならない」

世一はメガネを指先で押し上げ、目の前——春の日の中で逆光となった人影に向かつて眩く、背中をびったりと、学校の塀に密着させたまま。

「もちろん想像力だけじゃない。詳細な知識と芸術的センス、そしてイメージを形にする技術力……人を人たらしめる全てが注ぎ込まれていると言ってもいい。そう、ゲームは悠久の歴史の中で育まれてきた人類文化の、極致にして最先端なんだよ」

世一の話聞いているのかいないのか、人影はじり、と一歩こちらに足を踏み出した。人影の側頭部で結われた長い髪が、不穩に揺れる。

世一は思わず肩を震わせ、磁石に引かれる砂鉄のように、背中をさらに強く塀に押し付けた。首筋を冷や汗が伝うのを感じながらさらに捲し立てる。

「そ、そんなわけだから、ゲームを楽しむのは文化的な人間であるならば当然のことなんだ。中には先端を行き過ぎるあまりライトユーザーに受けずトップの座を逃してきた、いつだって一〇年早い悲しき業を背負いつつもファンからすれば称えずにいられないゲームメーカーさえあるくらいで」

「今日こそ」

「ひい！」

ついに人影が——少女がぼそりと呟いた。その時には、世一はつま先立ちになって塀に張り付いていた。

少女が握った拳を、もう一方の手で包んだ。拳がゴキゴキと不吉な音を鳴らす。

「今日こそ世一に、友達作らせるから」

「そんな殺気立つて言うセリフかそれは!?」

少女は世一の言葉に聞く耳持たず、じつとりとこちらを睨み続ける。サイドテールに結った長い髪と、ことあるごとにたゆんと揺れがちな胸部が特徴的な女子。身を包む制服のデザインは世一と同じだ。

まだ放課後になって十分足らずの時間で、校門の周りには二人以外に生徒の姿はなかった。「高校入ってもう一カ月になるっていうのに、世一がクラスにまだ友達いないっていうから、私の友達紹介することになったよね? そう決めたよね?」なのにそれから毎日毎日逃げ回ってきて、この幼馴染は……!!

「と、とりあえず落ち着け、千依」

確かに世一と彼女——丹羽千依は幼馴染で、それこそ赤ん坊のころからの知り合いだ。瀬川家の隣家の一人娘で、小中学校はおろか、この春には同じ高校に進学している。

生まれた病院まで一緒に保育器の中でも並んでいたというのだから、ここまで行くと腐れ縁にも程がある。

幼馴染をどうにか落ち着かせようと、世一は両掌を彼女に向ける。

「だ、だからって校門で待ち構えてなくてもいいだろう。それにお前が一方的に決めただけで

僕は友達を紹介して欲しいなんて言った覚えはないし、今日だって早く帰って新武器の解放クエをやらなければならないから——」

「そんな義務を負った人間はこの世にいないっ！」

「痛い！」

千依が鋭く頭を振ると、サイドテールがべしつと世一の横顔を打ち据えた。

世一はずれたメガネを押し上げながら呻く。

「く……相変わらずモーシヨンの読みづらい尻尾攻撃。攻略の糸口が見えない……！」

「ゲーム脳の言語でぶつぶつ言わないの！ ゲームをするなってわけじゃないけど、世一の場合、朝から晩までゲームゲームゲーム……高校生になったんだから、他にやることあるでしょ！」

「お、お前は僕の母さんか」

「そのママさんやパパさんが海外に行っちゃってるから私が言ってるんですけど何か!？」

「いえ何も！」

視線の圧力に思わず顔を逸らすと、千依が肩をがっちり掴んできた。そしてにつこりと微笑む。掴まれた肩の骨がミシミシ鳴いていることにさえ目をつぶれば、その笑顔はタンポポのよう

に愛らしかった。

「それじゃ、学校戻ろつか？ 大丈夫、ちゃんと男子も紹介するよ？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。間違つてホントに友達なんて出来た日には、ゲームをする時間

が削られ——」

「あん？」

「この幼馴染怖い」

タンポポ系笑顔のまま凄まれて、世一は頬を引きつらせる。

（ま、まずい……これは難易度の高いクエストだぞ……）

思わずゲームになぞらえる世一。クエスト名は『幼馴染から逃げきれ』か『友達を紹介されるな』といったところで、クエ開始のきっかけは数日前に千依が、クラスに馴染めたかとかそんなことを世一に聞いてきたことだった。

深く考えずにありのままを伝えた結果——まあ、こういうことになっている。

このまま連れて行かれたら、千依のことだ、うまいこと自分の友人と世一との橋渡しをするに違いない。彼女はそういうスキルを持ったヤツなのだ。

すごく困る。

（ただでさえやりたいゲームが渋滞してるのに、友達なんて時間を吸われるもの……冗談じゃない）

ゲームは一日一〇〇時間、しかしゲーム以外は省エネ——それが世一の信条だ。

（だというのに、なんでこいつは今さら……僕に友達がいらないのなんて元から……ん？ いや、待てよ？）

ふと思ひ立つて、世一は顔を伏せて一考した。それから唇の端を吊り上げる。

「いいだろう。僕のスキルを見せてやる」

「なんか悪い顔してるけど?」

「い、いやっ? してないぞ?」

慌てて微笑を引つ込め、世一は咳払いをしてごまかした。千依の懐疑的な視線を無視して、すぐに言葉が続ける。

「言っておくが、僕にだって友達はあるぞ?」

「ほーう。じゃあその人、私に紹介してみよっか?」

「あ、あからさまに信じてないな。だが紹介する必要もない。その友達というのは、お前のことだからな、千依」

「ん?」

何を言いだすのかとばかりに眉を顰める千依。

「それは幼馴染だし、そうだろうけど、でも——」

「僕にはそれで十分だ」

「へう!?」

真面目な顔で言う世一に、千依がぎよつと後退った。

「え、いやっ、ええ!? い、いきなり何言って……!」

「そもそも、だ。友達というのは『なる』ものじゃない。気がつけば『なっている』ものだ。友達になることを前提に紹介したりされたりというのは極めて不自然であり、そんな風に築かれた友達関係が長続きするとは到底思えない」

実際のところは知らないで、全くの当て推量で喋っているわけだが。

しかし千依は特に反論もせず、なにやら身を強張らせて俯くばかりだった。

「効いたか!? 僕のスキル——口車が!」

口車——あるいは『適当なことを言って煙に巻こう作戦』だ。勢いづいて、世一はさらに捲し立てる。

「それに友達というのは、そんなに何人も必要か? 表層的な付き合いしかない、学校という環境に強いられて作るような友達が何人もいたとして、それは本物の関係なのか? いいや違う」

これも適当なので、違うのかどうかは分からないが。

「外的要因による結びつきは、高難度ボスを周回するために野良でパーティーを組んでいるのも同然だ。たとえ全員がレアドロするまでやると決めていたとしても、自分に目当てのアイテムがドロップした途端に離脱するヤツが、絶対にいる! その上でフレ申請までしてくるようなヤツが! だからいいか、フレというのは量じゃないんだ。質でもない! 何度も冒険を共にしたという、その経験こそがフレを『仲間』にするんだ! いい連携をするのに必要なのは

仲間であり、仲間の存在は周回ブレイのために組んだよく知らないプレイヤー一〇〇人に勝る！ まあ僕はどちらかと言えば一人ブレイ用の据置機ゲームの方が好きだが、それでも……
——って、ん？」

いつの間にか話に熱が入ってしまったが、そんなことより、目の前の千依の様子がおかしいことに気づいて世一は眉を顰めた。

「わ、わた……私がいれば十分だなんて……」

千依は顔を俯かせたまま、赤くなった頬を両手で挟んでいた。今の熱弁も聞こえていなかった様子だ。

世一が言った覚えもない言葉をぶつぶつ呟いたかと思うと、ちらりと視線を上げ——

「ひゃっ」

世一の顔を見るなり、短い奇声を上げてこちらに背を向けてしまう。

「お、おい、千依？」

「いやっ、その、うん！ それはね、確かにね、わた……私、も……いやいやいや！」

千依がそのまま身体をくねらせ始めるものだから、世一はちよつと引いた。が——

（あれ？ チャンスか？）

何の状態異常なのか知らないが、今の千依は背後を——世一のことを全く見ていない。

（これなら……）

試しに、世一はそろそろと壁伝いに移動してみた。

「ちょ、ちよつと待ってね！ 突然だから、こ、心の準備とか、あの……！」

千依は意味の分からないことを呟くばかりで、こちらの動きに気づかない。

よし、と胸中で唸って、世一は扉に背を付けたまま校門を目指す。門はすぐそこだ。

（よく分からないが、どうやら僕のスキルが功を奏したらしいな。このまま逃げればこのクエは完了——いや、このイベを回避してもクエ自体は完了とはならないか。だが、少なくともこの場合は、僕の勝ちだ！）

「あ、でもね、それはそれとしても、やっぱり友達はいた方がいいと思うんだよね。だつてせっかく高校生になったわけでしょ？ もちろん世一が好きなら、ゲームもいいんだよ？ いいんだけど、少しくらい青春っぽいこととして、思い出作るべきじゃないかな？ ほら、その……わ、私も一緒に……ね、世一っ」

最後の一言と同時に、千依はタンポポのような笑顔と共に振り返った。一瞬壁と向き合ったものの、その視線がすぐに校門に向く。

「あ……」

笑顔の千依と目が合って、世一は呻いた。すでに校門の石柱までは辿りつき、半歩、学外に出ているところだった。

「世一？」

千依が笑顔のまま首を捻り、世一は思わず石柱に背中を貼り付ける。

「ちが、違うぞ、千依これは――」

「貴様、逃ゲルタメニ、適当吹イタカ？」

「いやいやそんなことはないというか微妙に言葉がおかしなことになってませんかね!？」

「世一？ 肋骨^{ろつこつ}って片側一二本、左右で二四本あるよね？」

「は？ あ、ああ、まあ……そうらしいな？ それが？」

にこにこしながら、千依はゆつくりと両の拳を構えた。美しい構えだった。

次の瞬間、千依の顔から笑みが消え失せ、鬼と化す。

「三本選べ」

その三本をどうするつもりなのかは聞かないでおくことにした。

「し……」

慌てて後退すると、世一は素早く校門前の道に視線を走らせた。滅多に車の通らない公道は、今もガランとしている。

突き放すように校門の石柱から離れ、世一は走り出した。こうなればスキルもなにもあったものではない。ただ逃げるのみだ。

「しくじったあああッ！」

「逃がすかあ！」

鬼が追ってきた。

世一は久しぶりに全力で走った。

幼少の頃よりスポーツ万能で鳴らした幼馴染からどうにか逃げ切れたのは、暗殺ゲームで培った逃走技術のおかげに違いなかった。

クエスト完了とはいかなかったものの、まあ、なにはともあれ――
ゲーム万歳、だ。

1. 瀬川くんのリアルクエ

Segawa-kun ha
GAME dake
shiteitai.

ゲームの朝は遅い。

前日の就寝からして遅いからだ。

一度ゲームをする態勢に入ってしまうと、中途半端なところで切り上げるのにはそれなりの自制心を要する。そして瀬川世一はことゲームに関しては、自制心のなさに自信があった。

そのため毎日のように遅い時間にベッドに潜るようになるし、翌朝起きるのは、いつもギリギリの時間だ。早朝から活動しているときがあるとすれば、ゲームに熱中し過ぎて徹夜してしまい、寝るに寝られなくなったときくらいだろう。

「昨日は散々だったな……」

洗面台の鏡に向かって欠伸びしながら、世一は頭を掻いた。数分前に起きたばかりだが、既に制服を、着ているのか身体に巻いているだけなのかよく分からない状態で身に着けている。メガネも装着済みだ。

目立った特徴もない自分の顔立ちには興味を示さず、機械的に歯磨き洗顔、それに伴うメガネの着脱をこなしていく。

「リアルな運動は性に合わないっていうのに、まったく」

昨日は千依を振り切るのに、町内一周分は走った気がする。しかも千依と世一はお隣さんなので、振り切ったからといってすぐに家に帰るわけにもいかない。結局は携帯ゲーム機を片手に、人気のない神社へ向かった。

やがて日が暮れかけた頃に帰宅。PCのネットで新武器の解放クエに挑むも、クエスト完了まで至らぬまま睡魔に襲われ——今に至るというわけだ。

「僕としたことが、大事なクエを中途半端に放り出すことになるとは……」
それもこれも、幼馴染に追いかけ回されたせいだ。

「千依の世話好きにも困ったもんだ」

ここ最近の千依の行動を思い返して、世一は嘆息した。

中学の頃からそうではあったが、最近の彼女は輪をかけて世一の世話を焼こうとする。だいたい三週間ほど前から——ちょうど世一の両親が、仕事の都合で一時的に海外に転居した頃からだ。

「母さんに何か言われたんだらうなあ」

きつと渡航間際に母が、息子をよろしくとでも言ったのだらう。千依は根が素直なので、それを真面目に受け取ったのだ。

世一と千依双方の両親は、二人が生まれる以前から気の合う隣人だったらしい。同時期に子

供が出来たことでさらに付き合いが深くなり、今では家族ぐるみの仲良しさんをやっている。そのおかげで世一と千依も、物心つく前から一緒に遊ぶ仲だったわけだ。

洗面台のある脱衣所を後にしながら、世一は小さく肩を竦めた。

「難解なクエが始まってくれたもんだ。僕は楽しい学校生活より、楽しいゲームをしたいっていうのに」

世一はゲームが好きだ。そして両親不在の今、我が家には世一のゲーム好きに小言を言うものは誰もいない。

片耳にイヤホンをし、もう片耳を廊下を近づく足音への警戒に使いながらPCゲーをする必要もない。図書館で勉強すると言って、ノートの間に携帯ゲーム機を挟んで出かける偽装もいない。夜中にベッドを抜け出して、暗いリビングで排気音の大きさを気にしながら据置機をプレイするという、心臓に悪い行為ともおさらばだ。

「そう、今やこの家はゲームし放題の夢空間。リアルのカエストなんぞに決してジャマはさせないぞ、くつくつく」

寝起きの妙なテンションで一人笑いながら、世一はキッチンで冷蔵庫の扉を開けた。中はがらんとしていて、調味料の類と飲み物しか見当たらない。

「そもそも、ゲームはすればするほどいいに決まっている。ゲームとは今も進化を続ける遊びの大字宙にして、戦いの荒野。作品によっては遊戯性を備えた総合芸術とさえ言える。感性を

磨けて、知識を吸収できて、しかも楽しい——こんな素晴らしいエンターテインメントが他にあるのか？ いや、ない！」

昨日とはまたちよつと違うゲーム持論をぶつぶつと呟きながら、確信を込めて頷く世一。

「まあ確かに、ドヤ顔でSNSに投稿して自分がいかにセンス溢れる洗練された人間かをアピールしたいなら、映画やら音楽やら演劇やらの方がふさわしいかもしれない。だが自分の腕前を上げる喜びを知らずにただ享受するだけのエンタメで満足するなど、僕にはできないのだフハハハ……あー、まずい眠いぞ？」

自分でもちよつとおかしくなっていると自覚できるほど眠い。

とりあえず頭を正常に働かせるため、世一は炭酸飲料のペットボトルを掴んだ。屈んでいた背筋を伸ばしながら冷蔵庫の扉を開けると――

「へー。そうなんだ」

すぐそばに千依が立っていた。

「うおッ——おこー」

驚いて飛び退いた拍子に、キッチン台に腰をぶつける世一。

ひとしきり痛がったあとで顔を上げると、やはり千依はそこにいて、腰に両手をあてて仁王立ちしていた。

高一女子としてはおそろく平均的な身長。面立ちにはまだ幼さが残るものの、凜とした空気

を纏^{まと}って見える。長い髪はリボンでサイドテールにまとめられ、肩の上まで垂れていた。

ほっそりと引き締まった体軀^{たく}ではあるが、ただ一点、胸部だけは平均を軽く凌駕^{りようが}する成長ぶりだ。僅^{わずか}かに胸を張るような姿勢でいるせいか、動きやすさ重視の伸縮性のある素材でできたジャケットが、滑らかで柔らかな球状に張り詰めている。

毎日顔を突き合わせているとはいえ、二・二・五次元に慣れ親しむ身としては、ちょっと迫力があり過ぎる。が、千依の冷ややかな瞳を見ると、そんな気分も吹き飛んだ。

そして次の瞬間、千依の姿がふっと視界から消えていた。

「え？　なんだ、僕は幻でも見て——うごあ！」

もちろん寝ぼけた頭が見せた幻などではなく、幼馴染は素早い身のこなしで世一の脇^{わき}に回り込んだだけだった。

頭に細い腕が絡みついてきて、そのまま引きずりおろされる。世一は腰を曲げたただで、倒れるのはどうにか免^{まぬ}れた。が——

「おはよう、世一。今日は逃がさないから」

側頭部をぎりぎりとして締め付ける完璧なヘッドロックが、世一を捕えていた。

「オ、オハヨウゴザイマス千依さま！　ただこれはちょっとアレだぞ！——当たってるぞ!!」
見事な技のキレではあるものの、千依に限っては威力半減だろう。いくら腕の締めつけをきつくしても、逆サイドでは頭部が柔らかな塊^{かたまり}に——たわわと育った胸に埋もれるばかりだか



らだ。

なので当たっているところの話ではないのだが――

「う、うるさいっ！　こうでもしないとまた逃げるでしょ！」

千依はさらに強く腕を締め、世一の顔を胸に押し付ける。制服と、張りがありつつもふわふわした弾力越しに、千依の心臓が早鐘を打つのが聞こえてくる。

「分かった、逃げない！　逃げないから――って」

締めつけと柔らかさの同時攻めに世一もパニック気味だったが、わずかに残った冷静な部分
が、はっと大きな疑問に行き着いた。

「じゃない！」

「きやう！」

千依の柔らかさを利用して、すぽんと頭を抜く。

世一は素早く後退しながら、幼馴染に指を突き付けた。

「なんでいるんだ僕の家に！」

「世一のママさんから合鍵預かってるからだけど!？」

「聞いてないんだが!?　逆ギレ気味にそんな重要なことを明かされても困るんだが!？」

「私だっていつ言い出そうか結構悩んだよ！　ママさん、世一にはこのこと教えてなかったみたいだし！」

千依は千依で、顔が真っ赤になっていた。

「そ、そもそもなんでうちの親がお前に合鍵を渡すんだ……」

確かに世一の両親と千依は仲がいい。世一と千依も、半ば兄妹もしくは姉弟のように育ったわけだが――だからと言って合鍵まで預けなくてもよくはなからうか。

千依は嘆息して、制服の乱れを直した。まだ頬に赤みが差しているものの、ひとまず落ち着いたらいい。

「なんでもなにもないでしょ。ママさんには『あの子に一人暮らしさせたらヤバイことになるに決まってるからホントにお願い。いやホントに』って、マジトーンで言われたよ？」

「はあ？　何を言ってるんだ母さんは。僕が一人暮らしすること、どこがヤバいつて言うんだ？」

世一が首を捻ると、千依はじつとりとした視線をキッチン台のペットボトルに向けた。

「うん、今日の朝ごはんは何？」

「コーラだな」

「……昨日の夜は？」

「パンの耳と具のない味噌汁だったか？」

「さ、最後にまともに野菜を食べたのいつ？」

千依の頬が引きつったものの、世一は気にせず正直に応えた。

「覚えてないな。野菜って高くないか？ ゲームし放題記念にちよつとネットゲとスマホゲーに課金し過ぎて今月の仕送りがもう残り少ないから、手が出せないんだよなあ。というかパンの耳が切れたから補充しておかないと、味噌と水分だけで残り日数の生存はさすがに難易度高い」と――」

「早くもヤバイことになってるじゃない！」

「なにイこのことだったのか!？」

母が何を危惧^{ききん}していたか突然悟る世一。千依がさらに声を張り上げた。

「つていうか一人暮らし始めた途端、そんなことになるまでゲームにお金使ったの!？」

「しまったつい正直に！ なぜいつもありのままを話してしまうのか僕は！ 自分で思っている以上に心がきれいなせいで嘘^{うそ}が吐けないのか!？」

「迂闊^{うかつ}なだけだよ！ ホントにこの幼馴染は……!？」

「ま、待て千依!？」

幼馴染が眉^{まゆ}を吊^つり上げて一歩踏み出したものだから、世一はさつと後退^{あとひき}した。

「あ、あのですね、新装備でフィールドに出かける高揚感^{こうやうかん}はブライストレスであってデスネ」

「課金してたらブライストレスじゃないよね？」

「う……し、しかしだ、世の中には製品版でありながら後のアップデートでのバグ取りや大幅調整を前提にしたいわば有料^{ペイタ}β^{ベータ}みたいなリリースの仕方をしてるゲームだってあるわけぞ

れに比べたら全く良心的で――」

「よく分かんないけどとりあえずうるさい！」

「痛い！」

千依のサイドテール攻撃が世一の顔を捉^{とら}える。ゲーム界を憂^{うれ}う世一の訴えは届かなかったらしい。

「まったく！ ホントにまったく、もう!！」

千依が素早く近づいてくるなり、両手で世一の顔を挟^{はさ}んだ。今度はヘッドバットでも飛んでくるのかと、世一は「ひい!！」と思わず身を強張^{おほ}らせる。

だが予想に反して――というより予想だになかったことに、千依は親指で世一の目の下をもにゅもにゅとマッサージし始めた。

「こんなクマまで作つて。どうせ昨日も遅くまでゲームしてたんでしょ」

千依が世一のクマをもにゅもにゅし続けながら、キッチンからも覗^{のぞ}けるリビング――その一角に、非難じみた視線を送る。リビングはきれいなものだが、大きめのテレビの前だけは床に置かれた複数の家庭用ゲーム機を、絡まり合ったコードが取り囲んでいるという混沌^{こんとん}としたありさまだった。

「いや、昨日は――」

「やらなかったの？ それつてもしかして、私^{わたし}を騙^{だま}したことを気に病んで……」

「据置機じゃなくて、自分の部屋のPCでネットゲをいだだだだっ！ 入るッ、それ以上指を押し込むと先っぽが眼球の下に入るぞ千依ッ！」

一瞬ぱっと輝いた千依の瞳が、今は殺気を湛えていた。メガネがずれてよく見えなかったが。「そうだ思い出した！ 騙して悪かったとも思っていたんだって、昨夜は！ いやあ心が痛かったなあ！」

「ホントに？」

「まあ嘘なんですけど入る人入る！ いや、すみません本当です！ 本当なんですちよっと茶目ッ^{ちやめ}気を見せるタイミングを間違えただけですから千依さん！」

生来の正直さを意志の力で抑えつける世一。そんな世一を千依はしばし睨^{にら}んでいたが、やがて手を放して、深々と溜息^{ためいき}を吐いた。

「まあ、そういうことにしといてあげる」

「た、助かった……」

「つていうか実は昨日は、私も反省してたし」

「は？」

意味が分からず、世一はずれたメガネを直しながら眉を顰^{ひそ}めた。

「どういうことだ？」

「昨日世一を見失った後、最初は合鍵使って家で待ち構えてやろうって、部屋を暗くしたまま

息を殺して帰ってくるのを待って、世一の気が緩んできるところを背後から奇襲しようって思ってたんだけどね……」

「ちよつと言葉にならない恐怖を感じるんだが？」

「でも家に向かっている途中で、やつぱり無理やり友達を作らせるっていうのは、よくなかったかなあって思えてきて」

「ん？」

意外な言葉に、ぴくりと動きを止める世一。

「今、とても重要なセリフが聞こえた気が……」

「ママさんに頼まれて、少し気合い入れ過ぎたのかも。なんか、ごめん、ね？」

世一の眩^{くら}きが聞こえた様子もなく、千依が窺^{うかが}うようにこちらを覗きこんでくる。

「あ、いや……というか——」

世一は言葉を詰まらせてから、確認するように口を開いた。

「そ、それはつまり、だな。もう僕に友達を紹介するつもりはない——ということか？」

「え？ うん、そう言ったつもりだったんだけど」

「クエスト完了ッ！」

「ひあッ！」

思わず拳^{こぶし}を握った世一に、今度は千依が飛び退いた。

「い、いきなりどうしたの？ 大丈夫、世一？」
 「もちろん大丈夫だ。まさか勞せずして高難度クエをクリアできると思わなかったものだから、ちよつとはしゃいでみた」

「よく分かんないけど、あの……怒ってはない、の？」

「むしろ気分が高揚します」

「それはそれでなんか怖いんだけど!？」

もちろん迷惑でなかったと言ったら嘘になるし、煩わしく思わなかったわけでもなくはなくはない。だがゲーム三昧の日々が邪魔されずに済むことが分かった以上、今さらどう言う気はしなかった。

「いやあ良かった。本当に友達なんて作らされたらどうしたものかと思っていたんだ」

「た、確かに無理やりはダメだったかもしれないけど、その考え方はどうかと思うんだけどなあ。とにかくそろそろ出なさいけない時間だし、ちゃんと用意して」

再び溜息を吐くと、千依は緩んでいた世一のネクタイに手を伸ばした。幼馴染にタイのバランスを整えられながら、世一は大きく頷いた。

「奇しくも『逃走』が正解の選択肢だったとはな。負け確イベじゃなくて良かったが……まったく、クエストはゲームの中だけにしてほしいもんだ」

「そのゲーム脳の言語やめてよ、もう。さっきから何の話かよく分かんないし。それに言っ

おくけど——」

緩んでいた世一のネクタイをキュツと締め、さらにしわを伸ばすように制服を叩いてから、言葉が続ける千依。

「友達作りは置いておくにしても、世一の生活は、これから厳しくチェックしていくからね？ 私が合鍵でいつでも抜き打ち検査にこれること、忘れないように」

「……………」

そうだった。

上昇したアドレナリン値が急降下し、世一は頬を引きつらせた。

「あ、合鍵はチートアイテム過ぎて対処できないんだが」

合鍵奪取クエスト——にすらならない。

まさか金欠の今、錠の交換や追加など出来るはずもないし、万一出来たところでそのことを母に報告されたら痛い目を見るのは世一だろう。

千依が勝ち誇った微笑を浮かべる。

「ふっふーん、そうでしょうそうですね。分かったら私の抜き打ち検査を常に恐れ、日々健康で文化的な高校生活を送ること。ね？」

「ゲームは十分文化的なんだが。むしろ文化の先端なんだが」

「だとしてもゲームに一極集中し過ぎ。何事も過ぎたるは及ばざるがごとしって言うじゃない」

「それは違うぞ、千依。広く浅く……そんな表層をなぞるだけじゃあただ情報の海に溺れるだけだ。その分野の歴史を知り、体系を学び、誰の起こした革新が世の中に、そして次の世代にどんな影響を与えたか——そういった全体と部分の相関関係を、マクロとミクロの両方を吸収して初めて情報は知識へと昇華する。広く浅くが悪いことは言わないが、僕は一つの分野を究めようとする努力にこそ、真理へと繋がる道があると信じている」

「あ、はい。それでお昼ご飯は大丈夫なの？」

「流すなよ！ 要するに『ひたすらゲームがしたい』と言いたいだけの僕の演説を流すなよ！」

「なんならお昼用のお金貸すよ？」

「お願いしますだよくしょう！」

世一は即座に頭を下げた。千依の懸念通り、今は昼食を買うのも厳しい財政状況なのだ。

背筋を伸ばすと、安堵の息を吐く世一。

「いやあ助かる」

「自業自得だとしても、さすがの私もお味噌を舐めて生きろとは言えないしね。優しいでしょ？」

「優しい優しい。おかげで月末の新作のために取っておいてあるゲーム資金に、手を付けなくて良さそう——」

「使えそれを！」

「すごく痛い！」

千依のサイドテール攻撃が、世一の顔を打ち据えた。

「ああもう、やっぱりダメだこのゲーム脳！ 見張るだけじゃなくて、ちゃんと更生させないと——」

スナップの利いた一撃に悶える世一の目の前で、千依は虚空に視線を向けながら拳を握った。

「見ててくださいいママさん！ 私が世一に、健全な青春を送らせてみせますから！」

あ、ダメだ火がついてる。

「ど、どこで選択肢を誤った」

海に向こうの母に誓う千依に、世一はびくびくと怯えながら呻いた。ゲーム三昧の日々に、分厚い暗雲が垂れ込めてきた気がしてならなかった。

リアルクエスト——それはこの世の森羅万象をゲームという色眼鏡で見る世一が、現実で起きるある種の事象に付けた名称だ。

ゲームの中ではお使いからボスの討伐まで、様々なクエストがプレイヤーを待ち受けている。現実も同じだ。細かく分類するなら、朝起きて学校へ行くのも、高校を受験するのも、売り切れ必至の新作ゲームを確保することだってリアルクエストと言って過言ではない。

そう、人生はクエストで出来ている——と、世一は思っていた。

だが実際のところ、クエストに直面したと感じるのは日々起きる事柄のうちの、ごく一部に

限られた。つまり突発的で、厄介な出来事だ。

(ゲームの中ならいざ知らず、現実の厄介事は求めてないって言うのに……)

一限を終えたばかりの小休憩中。世一は弱り切った表情で、次の授業の準備を進めていた。世一の席は一番廊下側の列の、前から二番目。時折話しかけようとしてくる前の席の生徒は少し離れた友達のところにおしゃべりに出かけたようで、今は視界が開けている。

歓談に興じているのは前席の生徒だけではない。短い休憩時間だというのに、クラスメートのほとんどは、各々が所属するグループで集まっているようだった。

グループの数や規模に関しては、どこにも所属するつもりのない世一にはとんと分からなかったが。

教室に渦巻くおしゃべりには意識も向けず、世一は重い溜息を吐いた。

(友達を作られるのは回避できたものの、今度は合鍵か。どうにかできないものか……)

母も厄介なマネをしてくれたものと、つくづく思う。

子供の頃は互いの家を勝手に行き来していたし、別に千依に家に来てほしくないわけでもない。が、合鍵が千依の手の中にあるというのは、どうにも急所を握られている気分がしてしかなかった。

(とはいえ、やはり攻略可能なクエストだとは思えない……)

世一は憂鬱そうに頭を掻き、見るともなしに教科書を開いた。

今はただ、面倒なリアルイベやリアルクエがこれ以上起きないことを、祈るしかなかった。

丹羽千依は自分の席で頬杖をつき、ぼんやりと虚空を眺めていた。今日何度目になるか、呆けた溜息が唇から漏れる。

一限目の後の小休憩の最中で、クラスメートは短い自由時間を周囲の生徒と雑談を交わしながら過ごしている。入学からまだ一カ月ほどだというのに、既に打ち解けた雰囲気がこのクラスにはあって、いつもの千依ならそれだけでなんだか嬉しくなるところだ。

だが今は、周りのことなど目に入っていないかった。

「おいおい、どうした千依ちゃん」

「え？」

ふいに名前を呼ばれて、千依は顔を上げる。隣の席の女子が、椅子の上で身体ごとこちらを向いていた。

ショートカットの快活そうな女子だ。どこことなく意地の悪い、しかし茶目っ気のある微笑を浮かべて、こちらを覗きこんでくる。

「朝から色っぽい溜息連発しちゃって」

「い、色っぽいって。そんなことないよ、ユキちゃん」

ユキちゃんこと福井由紀。席が隣り合っただけで中学も違うが、今ではよく話す仲だった。

「いやいや。相当だったよ。息が桃色だったもん」
「ホントにそうなら病院行くよ、私」

口からピンクの煙を吐くなんて、世一のやるゲームにだって出てこないだろう。いや、出てくるのだろうか。よく分からない。

「悩み事みたいだけど、あれか？ 思春期か？ 例の幼馴染のことが、ん？」

「う……」

「にやり」

「ち、違うよっ？ ユキちゃんが思ってるようなことじゃないよ!? ただあいつはほら、私が面倒見ないと高校生の間ずっと孤立しかねないもんだからっ」

「はいはい。ゲーマーなんだよね、幼馴染くんは」

ユキを含めた特に仲のいい女子には、他の組に幼馴染がいて、どうやらクラスになじめていないらしいと相談したことがあった。世一に友達を作ろう作戦に協力を頼んだ相手も、その女子たちだ。結局徒勞^{とらう}に終わったが。

「その『分かつてるからみなまで言うな』って顔、すごく気にかかるんだけど、ユキちゃん。協力してくれようとしたのに逃げられちゃったのは、ごめんだけど」

「気にすんなベイビー。それより……」

ユキはわざとらしく肩を竦めた。

「千依ちゃんの『幼馴染くんと青春したい大作戦』、失敗かあ」

「そ、そんな作戦名だった覚えはありませんがっ！」

「あ、そっか。『幼馴染くんとチュッチュする仲になるためにグループ交際から始めよう大作戦』だった——」

「それがユキちゃんの最後の言葉だった、と」

「すみません調子に乗りました！」

千依がバキバキと指を鳴らすと、ユキはすごい速さで頭を下げた。千依は桃色とは程遠い、疲れた溜息を吐く。

「まあ、青春したくないとは言わないけどさ。せっかく高校生になったんだもん」

「だよね。JKって言ったら世界の中心、JK時代は人生の絶頂期だしね」

「そ、そこまでじゃないと思うけど。あいつ——世一にも青春を謳歌^{もっか}させたいんだよね。このままゲームばかりだと、なんか心配になっちゃって」

「放っておけないってやつね。まあ分かるよ」

ユキが同情するように頭を振った。

「最近学校の近くに迷い犬がいるみたいでさ。あたしも何度か見かけたことあるんだけど、その度に『こいつ一人であらふらしてて大丈夫かな』って心配になるし」

「ヒトの幼馴染を犬と一緒にしますか。確かにその犬も心配ではあるけど」

「でもさあ、あたしが思うに、今の状況って千依ちゃんにとつてはそう悪いことでもないんじゃないかね？」

「え？」

「だって春といえば出会いの季節じゃん？ 高校生になったばっかりのあたしたちなんて特にそう。だけでも、だ。話を聞く限りじゃ、幼馴染くんは新しい出会いを求める気がゼロなわけでしょ？」

千依が素直に頷くと、ユキの頬に意地の悪い笑みが戻った。

「おジャマな虫がつかずに済むってことですぜ？」

「む、虫って」

「まー現状維持にしかならないけど、幼馴染くんとは今まで通りでいられるわけだから、そんなに焦らなくてもいいと思うのよ、あたしは」

「そ、そうかな？」

「そうそう。千依ちゃん巨乳だしね」

「それは関係ないでしょっ」

囁き声で顔を赤くする千依に、ユキがにと笑う。同時に、チャイムが教室に鳴り響いた。各グループで固まっていた生徒たちが自分の席に戻り、ユキも気だるそうに机の中を漁り始める。

「今まで通り、か……」

確かにユキの言う通りかもしれない。

世一は「一事が万事ゲーム基準なので、それが治ってもっと視野が広がれば、二人の関係もちよっと先に行ったりなんかしたりして——などと期待をしていたのだが、今回の作戦は結果的に押し付けがましくなってしまうただけな気がする。

まずは、新生活に突入しても今まで通りでいられるという、それが大事なのだろう。

(それに……)

千依は机の横に提げられた自分の学生鞆を、ちらと見やる。鞆の中には世一の両親から預かった瀬川家の合鍵が、大事にしまわれている。

思わず頬が緩んだ。

(今まで通りじゃない部分も、もうあるんだしね。これからはご飯とか作りに行っちゃったりして……えへっ)

今後の合鍵の活用法を妄想しながら、千依は再び視線を上げた。机に教科書を並べていくユキに微笑む。

「ありがと、ユキちゃん」

「いってことよ。あとで数学の宿題写させてくれさえずれば」

「もうっ。今日ただだよ？」

しかし後に千依は、自分の考えが甘かったと知ることになる。
世一ならそのことについて、こう見解を述べただろう。

『エンカウントは、望まなくても勝手に発生する』
と。

NOW LOADING・・・

「失礼します。少しよろしいですか」

昼休みに入って間もない時間。世一は机の上に置いた鞆を漁っているところで声をかけられた。

意外そうに、そして少し迷惑そうに顔を上げる世一。

「僕か？」

「ええ、あなたです」

前席の生徒は既にどこかへ行ってしまうについて、声の主である見知らぬ女生徒は、その空いた机に片手について世一を見下ろしていた。

まだクラスメートの顔があやふやな世一にも、彼女が別クラスの生徒であることはすぐに分かった。彼女の髪が嘘のようなミルクティー色だったからだ。さすがにこんな際立った特徴の



持ち主は、クラスにはいなかったはずだ。
多分。

腰まで届くくらいに伸ばされた髪は、染めているようには見えず、艶やかで癖もなかった。面立ちは整っているが、涼やかな切れ長の目以外は純日本風だ。身長も平均的。

そしてクラスメートでないことを何よりも雄弁に語っているのは、彼女の身を包む——中等部の制服だ。

この学校は中高一貫。高等部と中等部の校舎は隣り合っているし、両方の生徒が使う共通の棟もある。世一や千依のような高校からの編入組もいるにはいるが、少数派だった。

少女は余裕を感じさせる穏やかな微笑を湛え、どこか尊大な仕草で前髪を耳の後ろに送った。「はじめまして、中等部三年の笹倉瑠璃理です。あなたが瀬川世一さんですね？」

「人違いだな。そいつなら向こうにいるぞ？」

「え？ そうなんですか？」

世一がそつげなく、そして適当に教室の奥を指さす。少女——ルリリは少し驚いた後、恐縮したように頬を染めた。

「これは失礼しました。私としたことが早とちりを」

「いや。じゃあ」

「はい。お手間をかけてすみませんです」

世一は立ち上がると鞆を引つ掴んで、ぺこりと頭を下げるルリリの横をすり抜けた。そのまま手近な出入り口に向かう。

背後でルリリと別の生徒——まだ教室に残っていたクラスメートとの会話が聞こえる。

「ええつと、瀬川先輩を探しているのですが……メガネをかけていて、ゲームばかりしているという……え？ 今の人ですか？ ですが違うと言われ……合ってる？ はい……なるほど……もしかして私、さらつと嘘をつかれ……」

まずい。

世一は廊下に出ると同時に早歩きに切り替えた。昼休みは貴重なゲームタイムだ。邪魔されたくないし、それ以上に彼女が何者か分からない。

校内にゲーム機を持ち込んでいる後ろめたさがある以上、触らぬ神に祟りなしだ。

「ちょっと待ちなさい！ やはりあなたが——ってもうあんなに遠くに——」

後ろから追ってきた声に、世一は舌打ちして顔だけで振り返った。ルリリが教室を飛び出し、小走りにこちらに向かってくるころだった。

走らない程度に速度を上げる世一。

「なんで逃げるんですか！」

「廊下は走ったらだめだぞ、後輩！」

「確かにですけど！ ですが先輩の早歩きも速すぎませんか!？」

ルリリはあからさまに女の子走り、世一との差はむしろ開く一方だった。世一はひとまず安心して前方に顔を戻す。廊下を階段の方に曲がればこのまま撤いてしまえそうだと、思った直後――

「はわあ！」

後ろで悲鳴が響いた。

再び振り向くと、ルリリが尻を突き出すような格好で倒れていた。背中や床に広がった髪が窓からの日差しを受けて煌めいている。

「……………」

どうやら何もないところで転んだらしい。

世一が思わず足を止め、廊下がしんと静まり返る。辺りの生徒たちの視線がルリリに、次いで世一に注がれた。

「勘弁してくれ……」

額を押さえて呻く世一。世一は目立つのが嫌いだ。変に目立てば、いずれ教師にまで、校内でもしばしば携帯ゲーム機を起動しているということがバレかねない。

周囲の生徒の困惑と非難の入り混じった視線を浴び続けるのも面倒だったので、世一は諦めて廊下を引き返した。

「えっと……キミ、大丈夫か？」

転んだきり微動だにしない後輩の傍らに屈み込む。と、彼女の手がすばやく動き、世一の手首を掴んだ。

ルリリが顔を上げて叫ぶ。

「捕まえましたあ！」

「なに！ まさか転んだのは作戦だったと――」

「そ、そのまま……うご、動かないで……ゼゼエ……ください、先輩。ちよつと酸素が、足りませゲホゲホツ……オエツ」

「違ったな」

これはマジなやつだ――と、世一は頬を引きつらせた。

「ひ弱過ぎないか、キミ」

「イ、インドア派なので」

「ところで、キミは風紀委員か何かか？ あるいは親がこの教師だとかPTAの会長だとか、理事長だとか」

「え？ いえ、どれも違いますけど、なんです？」

世一はほつと胸を撫で下ろした。どうやら世一のゲーム機没収を企む何者か、というわけではないらしい。

「立てるか？ 僕に何の用か知らないが、ここで倒れててもジャマそうだから、保健室まで付

き添うよ。仕方なくだが」

「ご親切に、申し訳ないです」

そもそも世一が彼女を騙したからこうなったのだから。

立ち上がると、ルリリはふらっと壁に手をついた。さすがの世一も心配になってくる。

「キミ、まさか何か持病があるとかじゃ……」

「筋金入りの箱入り娘なだけで、極めて健康体です。登下校は送迎車で、我が家の庭ではセグウェイで移動するものだから、体力がなくて」

ただの金持ちだったらしい。セグウェイで移動するほど広い庭ってどういうことだ。

なんだか馬鹿らしくなったものの、見れば転んだ拍子に膝を打ったのか、ルリリは片足を少し引きずっている。世一は溜息を吐いて頭を掻いた。

「とにかく保健室まで送っていく」

「お、思ったより優しいんですね、先輩。お金持ちなので優しくされるのには慣れていますけど。むしろ騙されたのが新鮮でしたけど」

「そうか。昼休みがもつたいないから早く行かないか？」

「そのそつけない態度も新体験なのです……が、保健室は結構です」

「なら僕はこれで」

「あなたはどれだけ愛想がないんですか!? そ、そうではなくてですね!」

即座に去ろうとする世一の腕を、ルリリが慌てて掴んでくる。

「保健室より、もっと都合のいい場所があるのです。先輩、そこまでお付き合いただいただけませんか？」

「はあ……」

一度付き添うと言った手前断りづらく、世一はしぶしぶ頷いた。

開け放たれていた扉から教室を覗き込み、千依はきよろきよと視線を彷徨^{さまよ}わせた。その手には巾着袋^{きんちゃくぶくろ}に入った弁当箱が提げられている。

「あ、あれ？」

教室は間違えていないはずだが、教えられていた席に世一の姿は見当たらなかった。

（お昼休みはいつも教室でゲームしてると言ってたんだけどな……）

しかも昼食は総菜^{そうざい}パンを適当に胃に詰め込むだけだと。今朝もゲーム資金とやらを切り崩して、コンビニでパンを買っていたはずだ。

わざわざ他のクラスまで出向いて男子を昼食に誘うというのは、さすがに恥ずかしくて、これまでトライしたことはなかった。だが今は世一の食生活が心配だし、無理やり友達を作らせようとしたお詫^わびも兼ねて——という名目で、千依のお弁当をおすそ分けに来たわけだ。

「あれ、ちーちゃん？」

ふいに目が合ったのは、中学の頃の知り合いだった。校内では少数派の、高校からの編入組の一人だ。扉にほど近い席で、千依の知らない友達と昼食を囲んでいる。

「あ、ミヨちゃん。あの、世一知らない？」

「それがさ」

ミヨの目がきらりと輝く。一緒にいる他の女子も、世一の名前にびっくりと反応していた。

千依が怪訝そうに眉根を寄せると、ミヨは嬉々として言葉が続けた。

「さつきすつきい綺麗な中等部の子が来て、瀬川くんのこと連れてっちゃったんだよ！」

「え」

「今もみんなとその話しててさー。ホント美人の中の美人って感じで、しかもお金持ちのお嬢様なんだって。なんか中等部からそのまま進学してきた人たちの間では、結構有名ならしいよ？ すこいよねー、瀬川くん。そんな人に興味持たれるなんて」

「え、あの、それって、世一がその美人と二人で、どこか行っちゃったってこと？」

「うん。まあ、そう言えるかな」

千依の頭の中でぐわんと、鈍い鐘の音が響いた。ミヨが首を傾げる。

「瀬川くんに用だったの？」

「え、いやっ。べ、別に大したあれじゃないんだ、うん。いないなら、別に……あはは」
引きつった笑顔を浮かべて手を振る千依。

少し離れた席にいた男子グループが「女子が立て続けに瀬川を探しにきただと……」しかもどっちも美少女……さらにこっちは巨乳……」「間違ってる、世の中の何かが間違ってるぞ……」と恨みがましい呟きを漏らしていたが、千依の耳には届いていなかった。

「こ、こは……!?」

中等部高等部共通の部室棟の一室で、世一は啞然と立ち尽くしていた。

部室の中央には広々としたカーペット、その上に鎮座するのはL字型に組まれた大きなソファとテーブルだ。ソファと向かい合う壁際には、こちらも大型のテレビが備えられている。そしてテレビ台の中や周囲には、数台のゲーム機が配置されていた。

この学校は一応進学校で、部活動にはあまり力が入っていない。中等部と高等部の区別がない部活も多いし、活動内容がややふやなところも結構あるのだとか。だがそういういい加減さを差し引いても、この部室の光景は異様だった。

「一体なんなんだ、この部室？」

世一が信じられない思いで呟くと、隣でルリリが、ふふんと尊大に微笑した。大きく腕を開きながら世一の方を向く。

「どうですか驚きましたか！ こは我が、『実況動画制作部』の部室です！」

「実況動画……って、ゲームのか？ キミ、ゲームするのか？」

「大好きです!」

ルリリはまるで自慢するように胸を反らした。

見た目の印象からゲーム好きというのは少し意外だったが、これでようやく合点^{がてん}がいった。ルリリが世一の察した通りのことを口にする。

「実は私、共に部を盛り上げてくれそうな人材を探しているところなのです。先輩の噂^{うわさ}を耳にしまして、一度声をかけてみようかと」

噂になるような覚えはないが、知られているなら仕方ない。

世一はふむと唸^{うな}って、改めてテレビ周辺を見やる。『実況』というからには、自分のプレイを解説やひとり言と共に収録し、動画サイトにアップロードしているのだろう。動画サイトが人気を集める昨今、メーカーが公式に動画化を許可しているタイトルはたくさんある。

「今やゲーム実況者は全世界の人気者です。もちろん、だからと言ってどんな動画を作っても許されるわけではありませんので、実況者のモラルも大事ではあります」

ルリリが腰に手を当て、自分も人気者の一人であるかのように胸を張った。

「なるほど」

「例えば我が部で言えば、ただの動画でなく実況動画であるのは、BGMをそのまま流さないためでもあり、このゲームのここに注目してほしいというのを言葉で伝えるためでもあります。BGMに関してはさほど神経質にならなくていいとは思いますが、サントラとか出してるゲ

ームだとやはり氣を使いますし」

「なるほど」

「まあ、実況ついでの不満を語ってしまう時も、その……極々たまにないわけでもなくもないのですけど」

「なるほど」

「さっきから同じ言葉しか聞こえてこないのですけど、先輩、興味失ってませんか？」

「失ったわけじゃなくて初めからないんだが？」

「なんなんですかあなたはあ!」

ルリリが手をわなわなさせて叫んだ。

「真面目な話をしているのですよ、私は! 日本のゲーマーがそんな体たらくだから、和ゲーは衰退したとか言われるんです!」

「おい突然話が大きくなったぞ」

「これが対戦ゲーなら編集でピー音だらけになっているところですよ!」

「それ対戦相手に暴言吐^はきまくってるってことだよな?」

「相手には聞こえてないのでいいんです! 最近は負けてもコントローラーぶん投げるのはい我慢できるようにしましたし!」

この後輩結構ひどい。

「それよりも！ 私は日本のゲーマーを自任する人々に言いたいのです！」

「な、なんでしょう？」

「もっと熱くなれよと！」

「ちょっと待ってくれ、目を見開いてこっちに寄ってこないでくれ。怖い」

一人で燃え盛っているルリリに、世一は押し留めるように両の掌てのひらを向けた。どうにか落ち着かせようと声をかける。

「熱中するのは結構だが、実況動画を作るのにそこまで気負う必要があるのか？」

「全ては和ゲーの復権のためですっ！」

火に油を注いだだけだった。

「ど、どういふことでしょう？」

正直ちよつと引きながら聞くと、ルリリが悔しそうに拳を握った。

「昨今の洋ゲーの台頭には目を見張るものがあり、オープンワールド系やFPSはもはや洋ゲーの天下だと言えます。ですがやはりゲームは和ゲーこそ至高にして究極！ ムキムキした野太い声のおじ様が肩幅広めのヒロインを引きつれてテロリストを鎮圧するより、思春期の少年少女が普段着同然の格好で世界を救う冒険に出る方が、よっぽどわくわくするというものじゃないですか！ ないですかあ！」

「別に否定はしないが、ムキムキのおじさんが機関銃でテロリストをなぎ倒すのがいいて人

も、いると思うぞ？」

「いくらゲームであつても、人に向かって銃を撃つなどもつての外です！」

PTAか。あと和ゲーにもそういうゲームはいくらでもある。

「剣と魔法の世界を舞台にした洋ゲーはどうなる？」

「モンスターデザインやダメージ演出のクロさが生理的に無理です！ 殺伐としていて、剣と魔法の世界なのに全然ファンタジー感が伝わってこないですし！ 和ゲーのスタイリッシュ、ファンシー、kawaiiをもっと見習うべきなんですよ！」

「洋ゲーにもほのぼのの出来る笑いがあつたりするけどな。すぐ横で同僚が戦つてのにボーっとしてるだけの衛兵とか。目の前のモンスターを完全に無視するNPCとか。剣しか持つてないのに城の外壁の出っ張りに配置されてる敵の騎士なんて、お前絶対上司に嫌われてるだらうて——」

「作り込みが雑なだけではないですか!？」

おおあじ 大味と言つてほしい。そういう部分や、癖の強すぎる登場人物などに突っ込みながらプレイするのも、洋ゲーの楽しみなのだ。最近の洋ゲーは作りが丁寧になっていて、むしろ寂しいくらいだ。

「とにかく、です！」

ルリリがびしやりと言う。

「ビッグタイトル以外にも、良作とゲーは今もたくさん出ているですよ！ この部室はそれを世に知ってもらうための、和ゲー復権作戦本部といっても過言ではないのです！」

「いや過言だろ———」と思ったが、面倒くさいので黙っておいだ。

「まあ、志だけなら立派な気がしないでもないか」

「だってなんですかだって！ 先輩はちょいちょい失礼な——」

「で、部員は何人いるんだ？」

「ぐ……無視とかされたことないんですけど、この際それはいいです。部員は私一人です。なので建前上は同好会です」

「……えつと、それでなんで部室がもらえるんですかね」

「私の父は、この学校に多額の寄付をしております。あとは、分かりますね？」

恐るべしマネーパワーだ。

「ちなみに備品は全て私が私費で揃えました」

マネーパワーだ。

「な、なるほど。とりあえず納得した。しかし活動内容は基本的にはゲームだろうか？ ならもつと人が集まっていんじゃないか？」

「仰る通りです。ゲームをする部活というだけでなく、この私が部長であることから、当初は入部希望者が殺到しました」

「さらっと自分を上げてくるな、キミは」

「あまりに大勢だったので面接をした結果……」

世一の指摘を無視して、ルリリは悲しげに頭を振る。

「入部者ゼロとなったのです」

「どんなシビアな面接をしたんだよ」

「対戦ゲームで私に勝つことを第一条件にしたのが、失敗だったのかもしれない。私、誰にも負けませんでしたので」

自分の胸に手を当てて嘆息するルリリ。手の下で、胸部がたわんと形を変える。今さら気づいたが、彼女の制服のふくらはぎは千依ほどではないが、この年の女子としては大きい方と思われた。

が、そんなことより——

「ほう。誰にも」

世一がメガネを光らせる。

「なので、わざわざご足労をいただいて恐縮ですが、先輩にも無駄足を踏ませてしまった可能性はあるのです」

「という？」

「先輩を部に勧誘するためではなく、実力を拝見しようと思って、ここまでお連れしただけで

すので」

「まるで僕もキミには勝てない、と言ってるみたいに聞こえるな」

「さあ。それは分かりませんが。私を前に物怖じしないその態度には、少しは見込みがあるかもと思わないではありません」

わずかに顔を俯け、ルリリは覗き込むようにこちらを見ってくる。その瞳は真剣だった。

先ほどまでのぐだぐだした雰囲気は消し飛び、二人の間に張り詰めた緊張感が漂う。

「先輩。一つお手合わせ、願えますか？」

「いいだろう」

即答して、世一はメガネを押し上げた。

「試されてよろうじやないか」

両者の合意により対戦種目として起動されたのは、日本が世界に誇るロボットアニメをゲーム化した、シューティング対戦アクションゲームだった。

「ま、まさか……」

ルリリの眩きが、勝負の終わりを告げる。一勝負しただけで、既に昼休みも残り僅かになっていた。

カーペットに座った世一はソファの上のルリリを振り返った。ルリリは果然とテレビ画面を

見つめたままだった。

「まさか私がバーフェクト負けなんて……！」

「まあ、勝負は時の運だ」

分割された画面では、世一の機体が勝利のポーズを決め、ルリリの機体が大破している。

世一は肩を竦める。

「一本目は、僕が負けたしな」

勝負は二本先取した方が勝ち、というルールだった。世一は一本目を逃した後、二本連取したというわけだ。

「も、もう一戦です！」

「いや、さすがにそんな時間はないな。そろそろ昼休みも終わりだ」

世一はコントローラーを置いて立ち上がった。ルリリが慌てる。

「でしたら放課後に！ 別のゲームでも私を負かしたら、あなたの入部を認めます！」

「え？」

「べ、別に卑怯ではないのですっ。やはり一ジャンルだけでは正しい評価は出来ませんし！」

「いや、そうじゃなくてだな」

心底不思議そうに、世一は顔の前で手を振った。

「勝負を挑まれたから受けはしたが、入部するつもりはないぞ？」

「ふあ？」

「入部したいと言った覚えもないが」

「ええ、まあ、はい。——え？」

一瞬啞然としたのち、ルリリが凄^{すば}い速さで身を乗り出した。

「本気でですか!？」

「学校でゲームが出来るのは確かに魅力だが、家でやればいい話だろ？ 動画サイトにアップロードとかも興味がない。代わりと言っては何だが、後片付けは頼むよ。僕はもう行くから」

世一は身体を横にしてテーブルとルリリの間を抜け、カーペットの端に向かう。そちらではカーベットの上がる際に脱いであった上履きが、揃えもせずに床に横たわっている。

「ちょ、ちよつと待ちなさい先輩！ 私の部の、初の部員になれるかもしれないですよ!？」

家柄、知性、美貌と三拍子揃ったこの私の——

慌て過ぎたのか、勢いよく立ち上がった瞬間ルリリの靴下がカーペットの上を滑った。

「へう?」

焦るというよりばかんとした様子のルリリの身体が、くるりと回って天井を仰ぎ、テーブルに吸い寄せられる。その危機感のない顔に、世一の方が慌てた。

「おい!」

咄嗟に伸ばした腕がルリリの背中を横切って脇腹の辺りを掴んだ。だが世一もほとんど振り

向き様で、支えきれなかった。世一まで足を滑らせ、どうにか後輩を引き寄せたと思つたときにはテーブルの天板^{てんぱん}が横から迫っていた。

「痛い!」

肩が天板の丸みを帯びた角に衝突し、鋭い痛みが骨を伝って駆け抜ける。だがそれだけでは終わらず、世一の身体は反転しながら落下を続けて、今度は反対の肩から床に叩きつけられた。

「さらに痛い!」

立て続けの衝撃に思わず身が強張る。薄いカーベットの上に横向きに倒れたまま、鈍痛の波が引くの歯を食いしばって待っていると——

「だ、大丈夫ですか?」

心配そうな声と吐息が、耳たぶをくすぐった。自分が後輩をきつく抱きしめていることに気づいて、世一はハツとした。

「すまないすぐ離れ——おこッ!」

慌てて身をのけ反^そらせた結果、後頭部をテーブルの脚に思い切り打ち付けた。倒れるまでの間に何十回と天地が回った気がしていたものの、結局はテーブルのすぐ足元に落ちただけだということ忘れていたのだ。

電流を流したような痛みと共に視界に星が瞬く。

「あ、がが……!」

「先輩!? 大丈夫ですか!？」

思わぬ追加ダメージに背を丸めたせいでルリリの肩口に額が触れそうになるが、世一は再び身じろぎも出来なくなっていた。

固く臉を閉じながら呻く。

「ぐ、う……す、すまない。今、どこから……!」

「い、いえつ、悪いのは私ですので、ご無理なさらずにっ」

ルリリは氣遣いを見せるものの、その声は裏返っていた。抱きすくめられた緊張からか、世一の耳元で早口で言葉を続ける。

「ホントにすみませんっ。私はどうも運動が苦手がよく転ぶもので、先ほどいい今といいご迷惑をおかけして申し訳ないと思っておりますがまさかこんなふうに庇つていただくとはっ。それに慌てて離れようとして頭をぶつけるなんて、ちよつとかわいいと——ではなくてっ! その……せ、先輩? まだ痛みますか? え、えつと……」

ルリリの手が世一の背中に回ったかと思うと、躊躇いがちに後頭部に触れてくる。指先が既にコブになり始めている箇所を探り当てた。

「せ、先輩はケアル派ですか? ホイミ派ですか?」

「アクアソル」

「魔法じゃない上にトラウマが甦ってくるので普通に撫でておきますね。よ、よしよし、です」

撫でられたためではないだろうが、痛みはじきに消えていった。世一はようやく力を抜き、背中を伸ばした。

目を開けると、当然と言えば当然だが、ルリリの顔が思った以上に近くにあってびっくりした。二人ともカーペットに横たわり、向かい合って互いの背中に腕を回している状態だった。

後輩が頬を赤くして、上目遣いにこちらを覗きこんでくる。

「良くなりましたか、先輩?」

「あ、ああ。すまない」

「そんなに謝らないでください。悪いのは私だと言ったじゃないですか」

痛みが引いた途端、ほとんど密着したルリリの身体の柔らかさに意識が持っていかれた。世一は後輩の背中に回したままだった腕を咄嗟に放そうとしたが、成功したのは片腕だけだった。もう片腕はルリリの身体の下に敷かれていて抜けなかった。

ルリリも世一に抱き付いたまま離れようとしなない。

沈黙を避けるように世一は口を開いた。

「キ、キミこそ大丈夫だったか?」

「はい。先輩が身を挺して庇ってくださったおかげです」

「別にそういうつもりはなかったんだが。ただ咄嗟のことだったただけ」

「ふふ、こんな時でも無愛想なんですわ、瀬川先輩は」



「そ、それはどうも」

くすりと微笑むルリリの視線に耐え切れず、世一は目を逸らした。

「じゃ、じゃあ僕はそろそろ——」

「先輩」

身を起こそうとしたところを呼び止められて、世一は視線を戻した。ルリリは優しく微笑んだまま、まだ世一をじっと覗き込んでいた。

「やっぱり初めての入部者は、先輩がいいです」

「は？ いや、悪いが僕は……」

「ですのでこうしませんか、先輩。もう一度勝負をして私が勝てば先輩は入部。先輩が勝ったら私が……」

ルリリが世一の背中に回した手で、ぎゅっと制服を掴んだ。

「なんでも一つ、先輩の言うことを聞きます」

「な、なんでも？」

「はい、なんでも……です」

ルリリの頬は真っ赤に上気し、瞳はうるんで見えた。

そしてそのまま辺りに沈黙が落ちる。部屋の時計がコチコチと針を打つ音と、制服越しに伝わる鼓動だけが大きく聞こえた。二人の間でルリリの胸が押しつぶされていた。足は今にも絡

まり合いそうだ。

「ですから、先輩。私と……」

うつむき加減だったルリリが顎を上げ、二人の顔がより近くなる。吐息すら感じられそうだった。形のいい唇から、誘うような言葉が漏れる。

「勝負ゲーム、しょ？」

「カードゲームみたいに言うな」

「うきゃっ」

世一はていとルリリの肩を押して、後輩を後ろに転がした。下敷きになっていた腕が自由になったところで素早く身を起こす。

「そんな勝負に乗る気はない。という事で、僕は先に行くぞ」

「んなっ！ こ、この笹倉ルリリがここまで言っているというのになんなんですか、先輩は！ 私を騙したり、逃げたり、そっけなかったり……と、突然優しくしたり……そして果てはその態度ですか!? 先輩と会ってから新体験が止まらないのですけど！ ゲームでも負けましたし、なんだか胸の辺りがもやっとします！ もやっと！」

カーペットの上で座り込んだまま喚く後輩は無視して、世一はさっさと立ち上がった。

「に、逃がしませ——ぬひゃあ！」

こちらの足にしがみつこうとしてきたルリリをあっさりかわし、今度こそ上履きに足を入れる。

「それとキミは、もう少し運動神経にステを振るべきだぞ。」

「ちょ、待ってください先輩！　せめて一緒に帰るとか——」

「テレビとゲームの電源入ったままだが？」

「あああ、忘れてましたっ。あ、ちょ、先輩!?　ホントに待たないんですか!?　瀬川先輩!」

ルリリが後片付けをしているうちに、世一は自分の鞆だけ掴んで部屋を後にした。
疲れた溜息が、世一の口から洩れる。

「まったくなんだったんだ。自分のゲームが出来なかったどころか、涙を呑んで買った昼食まで抜く羽目になったぞ、僕……」

「あ、諦めません！　絶対に、諦めませんからあー……」

廊下を数歩進んだところでルリリの叫びがこだましたが、無視した。

「よく分からないクエだったが、まあ、これで完了か？」

後輩の訴えを本気にせず、世一は肩を竦めた。

NOW LOADING・・・

放課後。

「わあ、世一だ。き、奇遇だね、こんなところで会うなんて」

昇降口で、世一は千依と鉢合わせた。というか――

「僕の下駄箱の真ん前に突っ立っておいて、奇遇と言いつつ切る度胸は買おう」

千依は明らかに世一を待ち構えていた。しかし認める気はないらしく、幼馴染は明後日の方向を向いてかすれた口笛を吹き始める。

昇降口前はまだ閑散としていた。放課後とはいえH Rが終わってすぐの時間。下校する生徒が集まってくるのはこれからだろう。

千依だって普段なら、こんなに早くここにいることはない。二人は登校時こそ一緒に来るものの、高校に進学して以来帰りは別々なのだ。

世一は胡散臭そうに千依を見据える。

「今度は何だ？　まさかまた友達を、とか――」

「ち、違うよっ。そうじゃなくて、たまには一緒に帰ろうと思っただけっ」

「じゃあやつぱり待ち構えてたんじゃないか」

「う……!」

語るに落ちた千依が一步後退る。世一は下駄箱からスニーカーを抜き出し、上履きと入れ替えた。スニーカーに足をつつまみながら言う。

「最初からそう言えばいいものを」

「むう。携帯と一緒に帰ろうって連絡入れてたら、信じた？」

「……………」

「ほら」

「き、昨日が昨日だからな。友達を引きつけてくるんじゃないかと警戒したかもしれない」
千依は既にローファーを履いていた。二人で昇降口から、日差しの下に出る。

「無理やりはやめたって言ったのに、どれだけ嫌がるかな……き、きれいな後輩にはひょこひょこついて行くくせに」

「は？」

首を傾げて千依を見ると、なにやら不服そうな顔でそっぽを向いている。

「何の話だ？」

「ぐ、偶然聞いたんだけど、今日の昼休みに……」

「ああ、そのことか」

世一のクラスメートから何を聞いたか説明されると、ようやく得心がいった。

「僕もよく分からないが、部活の勧誘だったらしい」

「らしいって……そんなあやふやな」

世一が歩きながら昼休みの出来事を話して聞かせると、千依は怪訝そうに眉根を寄せた。

「実況動画って……そんな他人がゲームしてるところとか、わざわざ見る人の？」

「超いる」

「そ、そうなんだ」

「僕はあまり見ないし、アップする側になる気もないけどな」

「ふーん。だから断っちゃった、と」

「そもそも部活動ってものの自体、性に合わない——」

世一は途中で口を噤む。考えてみれば、部活に所属する機会を自らふいにしたのだ。こんな話をしたら——

（また千依の小言が……）

内心びくびくしながら千依を見やると、予想に反して、彼女は安堵したような顔で小さく微笑んでいた。

「ち、千依？」

「まあ性に合わないんじゃない、仕方ないよねっ」

「ああ。だ、だよな」

突然の上機嫌に、なんだかこちらが戸惑ってしまう。

「お昼まで食べられなかったなんて、災難だったね。ど、どこか寄って行こっか？」

「腹ごしらえにか？ そんな金はないって知ってるだろ？」

「そうだった……まったく、食費削ってゲーム買うなんて、もうダメだからね？」

「了解シマシタ」

「私が抜き打ち検査できるってこと、忘れないように。そのうちどんなごはん食べてるか、見に行くからね」

千依がぴっと指を立て、世一に釘^{くぎ}を刺した。世一は口をへの字に曲げて呻く。

「合鍵は返してくれよ」

「ダーメーですっ。これは世一じゃなくて世一のママさんから預かったんだから。返してほしいなら私じゃなくて、ママさんに言ってね？」

世一を見上げて、にっこりと微笑む千依。世一が母に訴えたところで無駄なことを、分かっているのだ。

「まったく……」

世一は額を押さえて、諦念^{ていねん}の溜息^{ためいき}をもらした。視界の端で、なにやら千依が小さくガツツポーズをしている。

「よ、よし。これでご飯作りに行っても不自然じゃなくなったよね。でもそうすると、まずは料理の勉強しないと……」

幼馴染がぶつぶつと呟くも、よく聞き取れなかった。

試し読み版はここまでとなります！

続きはGA文庫「瀬川くんはゲームだけしていたい。」でお楽しみください！ 12月15日頃発売です!!

